

強者の戦略

東大日本史のみかた 45 [解答編]

こんにちは。日本史の岡上です。さて、今回は9世紀後半の政治に関する出題でした。このあたりの知識は受験生であれば対応できたのではないかと思います。だからといって知っていることを書き並べるのではなく、あくまで与えられた資料文を丁寧に読み、そこから解答を作成していくことが東大日本史の基本です。

それでは解説を始めていきましょう。

< 9世紀後半の政治 >

設問

9世紀後半になると、奈良時代以来くり返された皇位継承をめぐるクーデターや争いはみられなくなり、安定した体制になった。その背景にはどのような変化があったか。5行以内で述べなさい。

問われているのは、9世紀後半の政治が「安定した体制」になった背景と、そこにあった変化。まずは「奈良時代以来くり返された皇位継承をめぐるクーデターや争い」について確認をしておきましょう。

奈良時代のはじめは、皇族や有力貴族間で勢力均衡が比較的保たれていました。しかし、聖武天皇から娘の孝謙天皇に譲位をした後は、光明皇太后と結んで政界で勢力を伸ばした藤原仲麻呂の排斥を画策した橘奈良麻呂の変（757年）、藤原仲麻呂が擁立した淳仁天皇と孝謙太上天皇が対立した恵美押勝の乱（764年）、称徳天皇が道鏡に皇位を譲ろうとするも和気清麻呂らによって阻まれる事件（769年）など、皇位継承をめぐるクーデターや争いがみられました。

その後、光仁天皇による行財政の簡素化や公民の負担軽減など政治再建政策は、桓武天皇にも引き継がれ、さらには平城天皇・嵯峨天皇にも引き継がれました。

そして、嵯峨天皇の時代の平城太上天皇の変（810年）をきっかけに蔵人頭や檢非違使が設置されるなど、天皇権力の強化が図られ、皇位継承についてもいったんは安定した状況になっていました。

しかし、その嵯峨上皇が没すると皇位継承をめぐる承和の変が起こったのです。

ではここから資料文を確認しながら、「9世紀後半の政治が安定した体制になった背景にあった変化」を考えていきましょう。

強者の戦略

(1) 842年嵯峨上皇が没すると、仁明天皇を廃して淳和天皇の子である皇太子恒貞親王を奉じようとする謀反が発覚し、恒貞親王は廃され、仁明天皇の長男道康親王（文徳天皇）が皇太子に立てられた。以後皇位は、直系で継承されていく。

資料文(1)では842年の承和の変が説明されていますが、ここで重要なのは「仁明天皇の長男道康親王（文徳天皇）が皇太子に立てられた。以後皇位は、直系で継承されていく。」という部分です。

すなわち、この部分から設問にあった「**安定した体制**」とは「**皇位が直系で継承されていく**」ことを意味していることがわかります。では、その背景とは何か。ここで資料文(4)を確認します。

(4) 858年清和天皇はわずか9歳で即位した。このとき外祖父で太政大臣の藤原良房が実質的に摂政となったと考えられる。876年に陽成天皇に譲位する時に、清和天皇は藤原基経を摂政に任じ、良房が自分を補佐したように陽成天皇に仕えよと述べている。

資料文(4)では文徳天皇の後、清和天皇、陽成天皇と皇位継承が行われたことがわかります。もちろん資料文(1)にあったように、これらの皇位は直系で継承されました。

ここで重要なのは「陽成天皇に譲位する時に、清和天皇は藤原基経を摂政に任じ、良房が自分を補佐したように陽成天皇に仕えよと述べている」という部分になります。すなわち直系での皇位継承が可能になった背景には、**当時天皇の外戚の地位を独占しつつあった藤原良房・基経といった藤原北家の存在があった**ことがうかがわれます。

これを補強する資料として資料文(2)を確認しましょう。

(2) 嵯峨・淳和天皇は学者など有能な文人官僚を公卿に取り立てていくが、承和の変の背景には、淳和天皇と恒貞親王に仕える官人の排斥があった。これ以後、文人官僚はその勢力を失っていき、太政官の中樞は嵯峨源氏と藤原北家で占められるようになった。

ここでは「嵯峨・淳和天皇は学者など有能な文人官僚を公卿に取り立てていく」が、承和の変以降は「太政官の中樞は嵯峨源氏と藤原北家で占められるようになった」とあり、9世紀後半には他氏排斥も相まって政治の中心が藤原北家と嵯峨源氏（嵯峨天皇系の氏族）によって占められていたことがわかります。

つまり、**承和の変以降は藤原北家が天皇の外戚の地位を独占し、また太政官の中樞も藤原北家と嵯峨源氏によって占められたことで、皇位継承と政治の運営が安定した体制になった**とまとめることができます。

さて、これで解答ができたように思ってしまうのですが、資料文はまだ残っていますね。ここで残った資料文(3)(5)もしっかりみていきましょう。

(3) 文徳天皇は、仁寿年間以降（851～）、内裏の中心である紫宸殿に出御して政治をみるものがなかったという。官僚機構の整備によって天皇がその場に臨まなくても支障のない体制になったためだと考えられる。藤原氏の勸学院、在原氏や源氏の奨学院など、有力氏族は子弟のための教育施設を設けた。

(5) 清和天皇の貞観年間（859～876）には、『貞観格』『貞観式』が撰定されたほか、唐の儀礼書を手本に『儀式』が編纂されてさまざまな儀礼を規定するなど、法典編纂が進められた。

強者の戦略

資料文(3)では、文徳天皇が851年以降、内裏の中心である紫宸殿に出御して政治をみる事がなかった理由として「官僚機構の整備によって天皇がその場に臨まなくても支障のない体制になったため」という指摘がされています。ではここでいう「官僚機構の整備」とは何を指しているのでしょうか。それについては、資料文(3)(5)にしっかりと記述されています。

資料文(3)では、藤原氏の勸学院、在原氏や源氏の奨学院など、有力氏族は子弟のための教育施設を設けたことが記述されています。つまり有力氏族による大学別曹の設置は、官僚を養成する大学の重要性の高まりを反映しており、官僚機構が整備されていたことがわかります。

また資料文(5)では、『貞観格』『貞観式』や『儀式』といった法典編纂が進められたとあります。嵯峨天皇の時代の『弘仁格式』に続いて法典編纂が進んだことは、官僚による政治の規範ができあがっていったことを示しています。

つまり、**9世紀後半には天皇権力の強化が図られる一方で、天皇が直接政治を主導せずとも安定して政治が運営される体制が整っていたのです。**

以上をまとめて、解答を作成してみましょう。

【解答例】

9世紀後半、天皇権力の強化が図られる一方で、官僚機構の整備や法典編纂が進んだことにより、天皇が直接政治を主導せずとも政治が運営される体制が整った。そして承和の変以降は藤原北家が天皇の外戚の地位を独占し、太政官の中樞を藤原北家と嵯峨源氏が占めたことにより、政治の運営のみならず、皇位継承も安定した。(148字)

さて、みなさんの解答はいかがだったでしょうか？

論述問題の解答はもちろん一つではありませんので、「これはどうだろうか？」と自分では判断つかな

いものは必ず、添削してもらうことをお勧めします。この『強者の戦略ホームページ』でもメールにて質問などを受け付けていますので、どしどし送ってきてくださいね。

それでは、今回はこの辺にいたしましょう。次回「東大日本史のみかた」をお楽しみに！！